

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320067

研究課題名(和文) 中国文学研究における新たな可能性 詩跡の淵源・江南研究の構築

研究課題名(英文) New possibilities in Chinese Literature Research-Construction of Jiangnan-genesis of shiji-research

研究代表者

植木 久行 (UEKI, Hisayuki)

弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：20160153

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,000,000円、(間接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近年、日本で提唱された「詩跡」(歴代の詩人たちに詠みつがれて著名になり、詩歌の創造に点火して表現の核となる力をたたえた地名)という新たな視点を導入して、中国文学研究における新しい分野を切り開くものである。長江下流の江南地方は、詩跡の淵源として多様な詩跡が集まっている。その代表的な詩跡を集中的に実地調査するとともに、それらが誕生して、継承・展開していく過程を綿密に調査して、詩跡が形成される種々の要因を考察した。

研究成果の概要(英文)：This study opens up a new field of Chinese Literature Research, because this study introduces a new perspective, Shiji. Shiji, which has been proposed in Japan, is an accumulation of place names that became famous for past poets wrote poems there, and has the power to become the core of representation and to ignite the creation of poetry.

Jiangnan district of the Changjiang River downstream is a genesis of shiji and has a variety of shiji. We have done fieldworks of its typical places intensively and have examined the process in which they were born as shiji, going to inherit and develop. We have considered a variety of reasons why they were formed.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、各国文学・文学論

キーワード：中国文学 詩跡 歌枕 俳枕

### 1. 研究開始当初の背景

詩跡とは、近年、日本で提唱された新しい概念である。中国古典詩文に現れる地名には、日本文学の「歌枕」(和歌の名所、吉野山・立田川など)や「俳枕」(俳諧の目で発見され、または捉え直された名所。高館・立石寺など)的性格を持つものが、確かに存在する。これを「詩跡」と名づけて、調査と研究が開始された。すなわち詩跡とは、単なる名勝古跡とは異なり、歴代の古典詩人たちに詠みつがれて著名になり、詩歌の創造に点火して表現の核となる力をたたえた地名(古典詩語)を指し、詩歌によって生み出された独特の連想作用を、一瞬のうちに読者の心に喚起させる場所なのである。

詩跡の語が次第に用いられ始め、詩跡の概念・機能・形成の研究も徐々に進んできた。詩跡は空想の文学地誌・歌枕よりも、現実の見聞の上に立つ俳枕に近いことがわかり、詩跡を著録する文献、南宋期に現れた独特の地理総志『輿地紀勝』『方輿勝覽』の持つ文学的価値が明らかにされた。しかし、なお未解明なところが多く、中国文学を詩跡的観点から行う新たな研究と鑑賞の進展が妨げられていた。

### 2. 研究の目的

中国文学は二千年以上の研究史を持ち、種々の観点から研究されつくしたように見えるが、「詩跡」という視点の欠落が、近年明らかになった。「詩跡」に類似する日本文学の研究(特に歌枕・俳枕研究)の成果を参照して、中国文学研究における新たな可能性を再構築し、さまざまな方面への影響を企図する。

中国の詩跡は、悠久の歴史と文学を背景に、全国に散在する。しかし各地に均等に存在するわけではなく、集中する地域もあれば、空白の地域もある。なかでも長江下流の江南地方こそは、詩跡の最重要な淵源として代表的な多様な詩跡(廬山・寒山寺・蘭亭・滕王閣・太湖など)が集中しており、この地域を精査して詩跡の原理・方法を把握することによって、中国全土にわたる詩跡研究を進める基盤とする。こうした意図のもとに、江南地方の詩跡を総合的に論述することを、本研究の目的とする。

### 3. 研究の方法

詩跡の個別的研究には、風土の持つ本質的情感や現状を見聞できる実地検証と資料収集が特に重要である。このため、4年間にわたる共同研究の前半(2年間)では、年に1度、4人全員で、詩跡の淵源 江南地方の詩跡調査を行った。

最初の年は、広義の江南地方の詩跡を、効率よく集中的に実地調査した。主要な探訪地は、浙江省杭州市 紹興市 諸暨市 金華市 衢州市 福建省武夷山市 福州市 泉州市である。この調査によって、南宋・陸游の

故居の跡の荒廃、諸暨市芋羅山の西施殿の整備、金華市の八詠楼の存続など、種々の詩跡の現状を理解できた。そして金華市・衢州市・泉州市等の詳細な市街地図や、『爛柯山志』『歴代詩人詠蘭亭』『武夷山志』等を手に入れた。

翌年は、江南地方の中核の一つ、江蘇・江西両省の詩跡を、集中的に実地調査した。今回の主要な探訪地は、江蘇省蘇州市 無錫市 南京市 江西省九江市 廬山 南昌市である。この調査によって、蘇州郊外の靈巖寺(館娃宮の跡)の現況、南京の瓦官寺の存続状況、桃葉渡遺址の荒廃と閉鎖、復元された烏衣巷の状況、開発のために撤去された九江市の琵琶亭、消失の寸前にある陶淵明ゆかりの栗里の醉石と「清風橋」(柴桑橋)の現状、南昌の滕王閣の隆盛など、今日まで伝存している種々の詩跡の現状を理解することができた。そして無錫市・九江市を始めとする諸都市の市街図や、詩跡研究に有用な『蘇州詩詠』『蘇州山水』『九江旅游詞大観』『滕王閣詩文』等も入手できた。

他方、課題研究を果たすために、毎年、弘前大学で研究会を開催して、研究代表者及び研究分担者が発表を行い、相互に論評して、研究の進展と深化をめざした(ただ研究期間2年目は、東日本大震災の影響が強いため、研究会の開催を中止した。また1年目には、愛知淑徳大学の詩跡研究者・寺尾剛教授を招いて、「李白と金陵詩跡」を発表していただいた)。この共同研究期間に、研究代表者の植木は、「第一次中国詩跡調査地とその意義」「館娃宮跡と真娘墓 蘇州の詩跡考」「恵山寺と恵山泉 江蘇無錫の詩跡考」、研究分担者の松尾は、「『輿地紀勝』と『方輿勝覽』の成立の背景について」「福建省の詩跡化について」「武夷」もしくは「武夷山」についての、別集以外における記述」「唐末五代から宋にかけての福建地方と詩跡」、研究分担者の李は、「叙景詩と詩跡 朱子の武夷山を詠む詩を中心に」「詩跡としての白鹿洞書院」「白鹿洞書院と詩跡」、研究分担者の許山は、「詩跡のデータベース化と課題」「杏花村」の成立 詩跡化の考察」「『杏花村志』における杜牧詩の受容」を発表した。そして、詩跡の個別的研究を行う際には、場所の確定、詩跡の形成過程、独特の詩的情趣・景物・主題、詩跡の継承性と影響、詩跡の現況、という5種の観点に配慮して、研究を進めることにした。

### 4. 研究成果

(1)江南・無錫の代表的な詩跡 恵山寺(南朝初期に建立された江南の名刹で近年再建)とその境内に湧く、飲茶に適した石泉水(恵山泉)を取り上げて、詩跡が形成される過程を綿密に調査して、形成の諸相を明らかにした。南朝宋の湛茂之が、元嘉年間(424~454)草堂を結んで読書した歴山草堂(歴山〔恵山の古称〕の湛長史草堂)が、恵山寺の

前身とされて、劉鑣と湛茂之の詩が伝わる。唐の貞元四年(788)、王武陵・朱宿・竇群の三人が同宿して詩を作って以降、恵山寺はようやく詩跡化した。その二年後には、高士・湛茂之の生き方を敬慕する丘丹が、この恵山寺を訪れて詩を作り、韋夏卿・李益らが唱和して、恵山寺は詩跡として確立する。そして張祐・許渾らが続いて詩を作る。他方、境内に湧く石泉水(恵山泉)を題材にした詩は、天宝十五載(756)、進士科に及第して無錫県尉となった皇甫冉が、その在任中に詠んだ詩に始まり、茶の専門家・陸羽が飲茶に適した天下第二の名水と評したことによって有名となる。そして李紳・皮日休の詩を生みだし、以後、恵山寺は飲茶の名水が湧く寺院として広く知られ、詩に詠まれていく(植木「恵山寺と恵山泉」)。

(2) 中央から離れた福建(広義の江南に含まれる)の名勝・武夷山は、中晩唐期、伝説の仙山、あるいは仏教・道教の修行地としての仙山として、ようやく詩に詠まれ始めたが、作品数に乏しい。北宋期、地元出身の詩人で、自らの作品集を『武夷新集』と名づけた楊億が、「建溪十詠」等の詩中で、武夷山の風光を初めて詠んで詩跡化した。地元出身の文人による、一種の郷土自慢的な詩跡の形成は、従来見られなかった、新しいケースである。この地域には、その後、北宋から南宋にかけて朱熹らが輩出して、武夷山の詩跡化に大きく貢献することになる。つまり、宋代における地域の発展、それに伴う地元出身の郷土意識の強まりが、詩跡化と密接に関係することを明らかにした(松尾「武夷山の詩跡化について」)。

(3) 清の郎遂が編纂した特異な地方志(村志)『杏花村志』12巻にもとづいて、晩唐・杜牧の作と伝える七言絶句「清明」詩によって詩跡化した「杏花村」(現・安徽省)の、杜牧詩を踏まえた作品の継承・展開の過程に関して、詩型のもつ表現機能に着目して調査し、詩跡が形成される際、詩型が関与する一ケースを明らかにした。「清明」詩による詩跡化は遅れて明代であり、その詩跡化に当たっては著名な詩人がほとんどおらず、明代の群小詩人が詠み継いで大きな作品群を生み出すことによって、「清明」詩を池州・杏花村での作、というイメージをもたらしたことを解明した(許山「『杏花村志』と「清明」詩の詩跡化」)。

(4) 江蘇省蘇州市区の近郊にある吳中第一の名勝・虎丘に現存する、歌舞に巧みな唐代(中唐期)の妓女・真娘の墓は、死後、ほどなく中唐の蘇州刺史・白居易が取りあげて詩跡化し、沈亜之・張祐らがこれに続いて、唐末ごろには『虎丘寺題真娘墓詩』(中晩唐期の詩を集めた総集、1巻)が編纂される状況を生む。この詩跡の形成過程を丹念に調査し

て、詩跡の淵源 江南の詩跡が持つ特色の一端を明らかにし、宋代以後の代表的な真娘墓詩にも言及する(植木「蘇州真娘墓詩跡考」)。

(5) 福建(広義の江南に含まれる)の名勝・武夷山付近は、北宋以降、次第に濃厚な文化的香りが漂う地域となった。宋代理学の集大成者・南宋の朱熹は、淳熙十年(1183)から紹熙元年(1190)まで、自ら創設した武夷精舎に住んで、弟子の教育に専念する一方、自らの学問体系を完成させた。と同時に、この時期、優れた叙景の詩、「武夷十擢」(九曲擢歌)「武夷七詠」「武夷精舎雜詠」十二首を始めとする、武夷山を詠む五十首以上の詩を作成した。これらの作品群は、武夷山の詩跡化に大きな役割を果たしたが、なかでも全長十キロの九曲溪を詩跡化した「武夷十擢」(淳熙甲辰中春、精舎閑居、戯作武夷擢歌十首、...)は、十首の七言絶句を連ねて武夷九曲の全景を歌った名詩であり、それに懇切な評釈を加え、その意義を明らかにした(李「叙景詩と詩跡」)。

(6) 元明清期、中国の各地に新しい詩跡が誕生していった。そうした新誕生の詩跡の特色を研究するために、広義の江南地域に属する采石太白樓(謫仙樓)・于忠肅墓・泉州開元寺を始めとして、中国各地に散在する医巫閭山・点蒼山・盤山・滇池・薛濤井・盧溝橋・濟寧太白樓・晴川閣・烏魯木齊・伊犁・嘉峪関・山海関に対して基礎的な調査を行い、それぞれの詩跡が形成されていく諸相を明らかにした(植木「元明清期に誕生した詩跡初探」)。

(7) 詩跡の淵源・江南研究の一環として、『詩経』から唐末に到る詩歌に詠まれた「蛮」字の用例を検証して、南方意識の時代的変遷を考究する。六朝末までの「蛮」字は、通常の「南方の民族、あるいは、それが居住する南方地域」の意のみに限定されず、北方や西方の諸民族を指す用例も存在した。しかし、唐代、詩人が中央から遠く離れた南方で生活して、当地の風物や環境を経験して実感を表現するようになると、唐詩の「蛮」字は貶義の要素が希薄化して、単に南方を指す語と化し、晩唐期には珍奇な印象を与える褒義の用例も見いだされる。こうした新詩の開拓者は南方を漂泊した盛唐の杜甫であり、この杜甫に導かれて、中唐の詩人たちは南方を描く詩の意境を拡大し、多様化したことを明らかにした(許山「中国古典詩に見られる「蛮」と南方意識」)。

(8) 江南地域に存在する詩跡の一端、浙江省杭州市の放鶴亭・林和靖墓、于謙墓、天竺墓、紹興市の王羲之故居・大扇橋、沈園、陸游故居、蘭亭、諸暨市の西施石・西施殿、金華市の八詠樓、衢州市の爛柯山、江山市の江郎山、福建省武夷山市の武夷山、九曲溪・玉

女峰、武夷精舍、福州市付近の西湖、鼓山、湧泉寺、泉州市付近の東湖、泉州開元寺、落陽橋、九日山等を取りあげて、実地調査の写真をまじえながら、各詩跡の特色を簡潔に記述した(植木「中国浙江・福建の詩跡考」)。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計9件)

植木 久行、恵山寺と恵山泉 江蘇・無錫の詩跡考(南朝・唐代を中心に)、中国詩文論叢、査読有、32集、2013、77~104

DOI:なし

松尾 幸忠、武夷山の詩跡化について 北宋初期まで中心に、中国詩文論叢、査読有、32集、2013、105~113

DOI:なし

許山 秀樹、『杏花村志』と「清明」詩の詩跡化 詩型にみる詩跡化の相違、中国詩文論叢、査読有、32集、2013、114~127

DOI:なし

植木 久行、蘇州真娘墓詩跡考、中国詩文論叢、査読有、31集、2012、72~88

DOI:なし

李 梁、叙景詩と詩跡 朱熹の武夷山を詠む詩を手掛かりにして、人文社会論叢(人文科学篇) 査読無、27号、2012、65~79

<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

植木 久行、元明清期に誕生した詩跡初探、中国詩文論叢、査読有、30集、2011、112~137

DOI:なし

許山 秀樹、中国古典詩に見られる「壘」と南方意識、中国詩文論叢、査読有、30集、2011、82~97

DOI:なし

植木 久行、中国浙江・福建の詩跡考、人文社会論叢(人文科学篇) 査読無、26号、2011、1~24

<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

[学会発表](計3件)

李 梁、近世東アジアの伝統「知」とその変容について 比較文学史の視野から、国際シンポ「近代化における東アジアの伝統と新潮流への転換」、2013年4月12日~14日、台湾大学人文社会高等研究院

李 梁、近世東アジアの新知識体系をめぐって、東アジア文化交渉学会第4回国際学会、2012年5月11日~13日、韓国高麗大学

[図書](計0件)

[産業財産権]  
出願状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]  
ホームページ等  
<http://shiseki.com/>

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

植木 久行(UEKI, Hisayuki)  
弘前大学・人文学部・教授  
研究者番号: 20160153

(2)研究分担者

李 梁(LI, Ryou)  
弘前大学・人文学部・教授  
研究者番号: 20281909

松尾 幸忠(MATUO, Yuki tada)  
岐阜大学・地域科学部・教授  
研究者番号: 20209505

許山 秀樹(NOMIYAMA, Hideki)  
静岡大学・情報学研究科・教授  
研究者番号: 10257230

(3)連携研究者

( )

研究者番号: